

『ハード・タイムズ』試論
「事実」に基づく「空想」

水野隆之

『ハード・タイムズ』(*Hard Times*, 1854)の主題を一言で述べるとすると、それは「事実」に対する「空想」の勝利ということになるだろう。(1)トマス・グラッドグラインド(Thomas Gradgrind)やジョサイア・バウンダビー(Josiah Bounderby)に象徴される「事実(fact)」の世界とサーカスの一団が象徴する「空想(fancy)」の世界とを対立させ、「事実」に支配された人間の欠陥を指摘するとともに、「空想」の必要性を説いたのだ。その物語の中心となるのが、グラッドグラインド一家である。グラッドグラインドは「事実」に基づく教育を実践する学校を経営していた。又、彼は自分の子供たちにもこの主義に基づいて教育を施し、それが子供たちの幸福になると信じていた。しかし、娘のルイーザ(Louisa)は、父親に言われるがままにバウンダビーと結婚して不幸な人生を送り、息子のトム(Tom)は銀行強盗となる。子供たちの不幸を目の当たりにしたグラッドグラインドは自分の誤りに気付き、人間には「頭の知恵(a wisdom of Head)」だけでなく、「心の知恵(a wisdom of Heart)」(2)も必要だと認識する。このグラッドグラインドの改心を通じて、ディケンズは「事実」に対する「空想」の優位性を訴えたのである。読み手によっては余りにも明白とさえ感じるこの対立関係(3)を設定することで、この小説の構成は非常に簡潔なものとなっている。(4)

しかし、ディケンズは「事実」のみに支配された世界の欠陥を認めながらも、「事実」そのものは否定していなかったのではないかと考えられる節もある。と言うのも、グラッドグラインドが自分の教育方針を述べる第一巻第一章のタイトルは「必要な一つのこと(The One Thing Needful)」となっており、一方グラッドグラインドがルイーザに自分の間違いと「空想」の必要性を認める第三巻第一章のタイトルは「必要なもう一つのこと(Another Thing Needful)」となっているからだ。つまり、「事実」も「空想」と同様に、必要なものとして捉えられているのである。とすると、双方とも必要なものであるなら「事実」と「空想」は対立関係ではなく、寧ろ相関関係にあるのではないかという疑問が生まれる。この例が示すように、一見明白と思える構図を取りながらも、この小説は「事実」対「空想」という枠組みでは説明しきれない要素も孕んでいるのである。そこでこの小論では、ディケンズが『ハード・タイムズ』において「事実」に支配された世界を批判し、「空想」の必要性を説きながらも、「事実」そのものを完全に否定していた訳ではないこと、延いては「事実」と「空想」との関係は、ディケンズの作家としての信念とも関わる根本的問題であったことを明らかにすることで、この疑問に答えたいと思う。

まず初めに、「事実」の世界とはどんなものかを見ておきたい。この小説のストーリーはイギリス北部の架空の工業都市コークタウン(Coketown)を舞台に展開する。功利主義の信奉者であるグラッドグラインドは実業界から引退した後、この町で学校を経営していた。この学校の教育方針は「事実」のみを教えることであった。そしてこの学校に通う子供たちは、「空想という言葉を完全に捨てなければならない」(5)と教えられ、御伽噺や物語などを読んで「空想」にふけることを禁じられている。その教育方針をグラッドグラインドが述べる場面からこの小説は始まる。

「さて、私が望むものは事実である。この少年少女たちに事実以外、何も教えるてはならない。

事実のみが人生において必要なのである。その他のものは何も植え付けてはならず、他のものは全て引き抜くのだ。事実に基づいて理性的動物の精神を作り上げるだけでよいのだ。これこそ私が自分の子供たちを育てる原則であり、又、この子供たちを育てる原則でもある。事実から離れてはならないのだ。」(6)

この「事実から離れてはならない」とする教育の拠り所となるのが、数値による物事の認識である。このことは、グランドグランドが常にポケットの中に物差しや計算表を携帯していたことで強調される。その教育の実態が具体的に明らかにされるのが、馬の定義をめぐる場面である。グランドグランドは、新入りの生徒であるサーカス団員の娘シー・ジュブ(Sissy Jupe)に、「二十番の女子」(7)と呼びかける。これは、事物だけでなく、人間も数字で計ることが出来ると考えるグランドグランドの価値観を暗示するものであろう。グランドグランドにとっては人間性も「単なる数字の問題、簡単な算術の問題」(8)となるからだ。そしてグランドグランドはシーに馬の定義をするように求めるが、彼女は答えることが出来ない。そこで彼は、模範的な生徒ビツァー(Bitzer)に馬の定義をさせる。

「ビツァー」とトマス・グランドグランドは言った。「馬の定義をしてみなさい。」

「四肢動物。草食。四十本の歯。つまり二十四本の臼歯、四本の犬歯、十二本の前歯。春には毛が抜け、沼地の地方では蹄も抜けかわります。蹄は硬いが、蹄鉄を打つ必要があります。年齢は口の中の痕跡で分かります。」このように(そしてそれより多くのことを)ビツァーは言った。(9)

馬を定義するに当たり、ビツァーは馬の歯の数を逐一並べ上げ、馬の外見を述べるだけに留まり、馬がどのような性質を持った動物であるのかは述べない。そしてそれが「事実」の世界では、完璧な答えとされる。この馬の定義からも明らかのように、「事実」の世界の人間の物の見方とは、物事を表面的にしか捉えないことである。そして目に見えるものは全て数字で表わすことが出来るとするのだ。

この馬の定義の場面は、現代的視点からすると滑稽に感じるかもしれないが、このような授業は当時のイギリスで実際に行われていたという。(10)そしてディケンズが『ハード・タイムズ』を書いた目的も、そのような教育を批判することにあった。実際ディケンズは書簡の中で『ハード・タイムズ』について、「私の風刺は数字と平均値以外何も見ない人々、この時代において一番邪悪で巨大な悪の代表者たちに対してのものである」(11)と述べている。ではディケンズが数学的事実を偏重する教育を批判する理由は何処にあるのか。

元々ディケンズは数字に対して、漠とした恐怖を抱いていたのではないかと考えられる。それを窺い知ることができるのが、『ディヴィッド・コパフィールド』(David Copperfield, 1849-50)の中の一場面である。ディヴィッドは、寄宿学校に入れられる前に、継父のマードストーン(Murdstone)とその姉から家で教育を受けるが、その時の体験をこう語っている。

授業が終わった後でも、一番嫌なことが算術問題となってさらにやって来る。これはマードストーンが私の為に考案し、彼が私に口述してこう始まる。「チーズ店に行って、一個四ペンス半のダブルグロスターチーズを五千個買ったら、支払いはいくらか」この質問にミス・マードストーンが密かに喜んでいるのが見える。私はこれらのチーズについて考えてみるが、答えが全く分からず、夕食の時間となるのだった...(12)

ディヴィッド自身、「マードストーン姉弟がいなければ」(13)と語るように、彼が算術の問題に当惑する原因は、マードストーン姉弟に対する恐怖によって頭が混乱してしまうからである。しかし、マードストーンによる授業は、算術だけでなく、文法や歴史、地理などもあった。それらにも増して算術を「一番嫌なこと」と考えるディヴィッドの中に、ディケンズの数字に対する嫌悪や恐怖といったものが表れているのではないかと推察出来る。少々論が飛躍するかもしれないが、ディケンズが数字を批判する背景には、数字に対する彼自身の恐怖心もあったのではないかと考えられるのである。

ディケンズが数学的事実のみを重視するグッドグランドを批判する最大の理由は、彼を初めとする「事実」の世界に生きる人間が、目に見えないもの、数値では表わせないものを理解しないからだ。では、目に見えないもの、数値では表わせないものとは何か。それは人間の心である。「事実」の世界の人間は、物事を判断する際に統計上の数値という表面しか見ず、そこに感情が入ることを許さない。その点を読者に認識させるのが、「空想」の世界の人間シシーである。シシーはレイザに、学校でマックチョークカムチャイルド(M'Choakumchild)先生から国家の繁栄について色々質問されたのだが、間違った解答をしてしまったと打ち明ける。例えばこんな具合である。

m

「ええレイザさん、今ではそうだったのが分かります。それからマックチョークカムチャイルド先生はもう一度質問すると言いました。こう言ったのです。この教室は一つの大都市でそこに百万の住民がいるのだが、路上で餓死する者が年間二十五人しかいない。ではその割合はどれ位か。そしてわたしはこう答えました それよりいい答えが思いつきませんでしたので 飢え死にした人たちにとっては、そうでない人たちが百万人いようと百万の百万倍いようと、やっぱり辛いことに違いはないと思います。その答えもまた間違いでした。」(14)

更にシシーは、十万人の人間が長期間の航海に出て、遭難した人が五百人だけだったとしたら、その百分率はどれ位かと質問される。それに対してシシーは、「亡くなった人たちの親族や友人にとっては無意味です」(15)と答えた。シシーがこのように答えるのは、彼女が餓死する人間や遭難者の苦しみを理解しているからに他ならない。シシーにとっては、死んだ人間の割合よりも死んだ人間の苦しみの方が大事だからだ。そしてそのような観点から物事を判断することは、「事実」の世界では間違いとされる。物事を数字の上からのみ判断することが正しいのであって、シシーのように当事者の苦しみを考慮するというような感情がその判断に入り込むことは、「事実」の世界では容認されないのである。故に、「事実」に支配されているグッドグランドやバウンダビーは、人間の心が理解出来ない人物となるのだ。グッドグランドとバウンダビーが親友である理由は、二人とも「完全に感情を欠いた人間」(16)という点で共通していたからであった。

例えば、グッドグランドがルイーザにバウンダビーとの結婚を勧める場面があるが、この時のグッドグランドとルイーザの会話は全く噛み合っていない。二人は意思の疎通が出来ていないのである。そしてグッドグランドは、結婚という問題にも人間の感情が入ることを認めず、ただバウンダビーが求婚してきたという「事実」のみを強調し、問題はただルイーザがこの求婚を受け入れるかどうかだけだ、と言う。ルイーザは自分の感情を押し殺して、この求婚を渋々受け入れるが、グッドグランドはルイーザの心が分からず、自分が成功したと考える。

「だってお父様」と彼女は続けた。「何て妙なことを私に聞くのですか。子供の間でさえよくあると聞いている赤ん坊の好みも、私の胸の中で安らかに休む場所なんてなかったのよ。お父様が私を大変用心深くさせて下さったので、私は子供の心を決して持ちませんでした。揺り籠の中にいた時から今まで、私を大変賢く扱って下さったので、私は子供の信仰や子供の恐怖を決して持ちませんでした。」

グッドグランドは、自分の成功と、それを示す証拠にすっかり感動した。「ルイーザよ」と彼は言った。「お前は私の苦勞に十分報いてくれた。さあキスしておくれ。」(17)

ルイーザの言う「子供の心」、「子供の信仰や恐怖」とはこの小説でいう「空想」のことである。自分がそういったものを持たなかったのは、父親であるグッドグランドのせいだ、とルイーザはかなり辛辣に、非難の意を込めて言うのだが、彼はルイーザの言葉を額面通りに、自分が彼女に施した教育に対する感謝と受け取り、その裏にあるルイーザの真意を読み取れないのだ。グッドグランドがルイーザの苦しみを理解するのは、彼が改心して自分の過ちを自覚し、幾分控え目ながらも「空想」の必要性を認める時である。

「事実」に支配された人間は、人間の心を理解出来ないという点を最も劇的に描き出しているのが、第三巻第八章の冒頭において交わされるグッドグランドとビツァーとの会話だ。銀行強盗を犯した息子トムの国外逃亡を企てるグッドグランドの前に、かつての教え子ビツァーが現われ、トムの身柄を拘束しようとした。この時グッドグランドは、ビツァーに同情を請うが、人の心が分からないビツァーにそんなことをしても無駄であった。

「ビツァー」とグッドグランドは気落ちして、彼に服従して言った。「お前は心(heart)を持っているのか。」

ビツァーはその奇異な質問を笑いながら、こう答えた。「それがなければ循環は不可能でしょうね。ハーヴェイによって確立された血液循環に関する事実を知っている人は誰も、私には心臓(heart)があるのかと疑うなんてことはしません。」(18)

事実のみに基づいて教育された人間の完成品となったビツァーには、グッドグランドの苦悩など皆目分らない。そもそも彼にとっては、‘heart’という語義の中に「心」という意は含まれていないからである。「事実」に支配された人間は人の心が理解出来ないということを、‘heart’という一語で見事に描き出した場面と言える。

このように「事実」に支配された人間は、心の理解が出来ない。そしてその原因は「空想」の欠如にあるとされる訳だが、実は「事実」の世界に生きる人間にも、「空想」が生じざるを得ないという矛盾が明らかとなる。それがバウンダビーの嘘である。彼は母親によって手厚く育てられたにも拘わらず、自分の立身出世の物語を作り出す為、更に満足のいく生活を保証されない労働者の不満をかわす為、自分は母親に捨てられ、溝の中で育ち、自力で工場主になったと吹聴していたのだ。 「空想」の存在を否定しながらも、バウンダビー自身、自らを偽ることによって自分を「空想によって創られたもの」(19)としていたのだ。彼はこのほら話をことある毎に口にするが、とりわけ印象的なのが、彼が「空想」の世界を象徴するサーカスの一団を前にこの話をする場面である。

「成る程」とバウンダビーは言った。「私は溝の中で生まれ、私の母は私から逃げ去ったのだ。そのことで私は彼女を許しているか。いや。そのことで彼女を許したことがあるか。いや、ない。そのことから私は彼女を何と呼ぶか。多分、飲んだくれの祖母を除けば、世界中で一番悪い女と呼ぶのだ。私には家族の誇りというものがない。私には想像上の感情的な大嘘はない。私はありのままを言うのだ。私はコークタウンのジョサイア・バウンダビーの母親を、たとえウォッピングのディック・ジョーンズの母親であったとしても、呼ぶべきように呼ぶ。だからその男も同様である。彼は逃亡した悪漢、ごろつき、英語ではそう言うのだ。」

「彼がなんであろうとなかろうと、英語であろうとフランス語であろうと、私にとっては同じことです。」とE・W・B・チルドラー氏は答えて向き直った。「私はあなたの友人に事実を話しているのです。もしあなたがそれを聞くのがお嫌なら、表に出て構いません。あなたは十分話をなさいました。そうですね。でもせめてお話はあなたの家でなさってください。」とE・W・Bは皮肉をこめて諷めた。「頼まれるまでは、この家でお話をなさらないで下さい。今ではもうあなたは自分の家をお持ちでしょうから。」(20)

「事実」の世界の人間であるバウンダビーが、自分の言葉とは裏腹に、「想像上の感情的な大嘘」を話す。その一方で、「空想」の世界の人間であるチルドラーが、あたかもバウンダビーの嘘を見透かしているかのように、そしてそれを非難するかのように、「私はあなたの友人に事実を話しているのです」と言うのだ。ここでは「事実」の世界の人間と「空想」の世界の人間との立場が、いわば逆転しているとも取れるのである。

このバウンダビーの作り話が示唆することは、第一に、人間は「事実」だけでは生きていけないとするディケンズの基本的概念であろう。「事実」のみを重んじるバウンダビーの心の中にも、「空想」の世界が存在せざるを得なかったということを通じて、「空想」の世界を人間から完全に消し去ることは出来ないという、「事実」の世界の限界を示していると考えられる。と同時に、ディケンズは『ハード・タイムズ』の中で「空想」の必要性を説いてはいるが、このバウンダビーの嘘は、決して擁護されるべきものとして扱われてはいない。バウンダビーの母、ペグラー夫人(Mrs Pegler)の言葉を借りれば、バウンダビーの嘘とは「邪悪な想像(wicked imagination)」(21)であり、寧ろ非難の対象となっている。では何故バウンダビーの空想は「邪悪」となるのか。結論を先に述べると、それは彼の「空想」が、自分は母親によって育てられたという「事実」を歪曲することによって生じたものだったからで

ある。

確かに「空想」は大事なものである。しかしそれは「事実」に立脚したものでなければならぬ。これは作家としてのディケンズの信念であった。ディケンズの友人であるジョン・フォスターは、その著書『チャールズ・ディケンズの生涯』の中の「小説家としてのディケンズ」と題した章において、作家の想像の仕事についてのディケンズの言葉を引用している。

「どんな描写に関しても、それが厳密な真実だと言うだけでは十分ではないと私には思われます。厳密な真実はなければならぬのですが、語り手の価値や芸術とは、真実を語る方法にあるのです。文学におけるこのことについて、私には為すべきことが沢山あると思われます。そしてこの頃のように、世を挙げて一切を恐ろしく文字通りの、カタログのようなものにしてしまう 簡単に言えば、物事を、どんな下らない人間でもそうすれば出来るような通分の計算にしてしまう 傾向のある時代においては、一種の庶民の暗黒時代を通じて庶民の文学を支える力そのものが、このような想像力に満ちた扱い方に基ついているのだという（私が信奉するものへの愛による）考えが私にはあるのです。」(22)

この部分はよく引用され、『ハード・タイムズ』と絡めて論じている批評も既に幾つか存在するが(23)、それはこのディケンズの主張と『ハード・タイムズ』の主題とが密接に関係していることの証拠であろう。「物事を、どんな下らない人間でもそうすれば出来るような通分の計算にしてしまう」、そういう「暗黒の時代」とは正に『ハード・タイムズ』で描かれる「事実」の世界と一致する。そのような時代において文学は有用であり、その文学は「想像力に満ちた扱い方」を為されていなければならない、とディケンズは主張するのだ。

このディケンズの主張から先に挙げた「事実」と「空想」は対立関係ではなく相関関係にあるのではないかという疑問に答える手掛かりが得られそうである。ディケンズは手放しで文学的想像を推奨した訳ではない。「厳密な真実」が、それだけでは十分ではないにしる、そこになければならない、と条件を付けているのだ。そして想像力を「真実を語る方法」としている。まず真実があって然るべきとされ、その真実を十分に語る為に想像力が必要とされるのだ。それはつまり「事実」に基づく「空想」ということになる。 「事実」から「空想」が生まれ、「空想」が「事実」をより強固なものにするのである。それ故、「事実」と「空想」のどちらも不可欠となるのだ。ここから「事実」と「空想」の相関関係が見出せるのではないだろうか。

真実を語る手段として想像力を用いる これは『ハード・タイムズ』で見られるディケンズの基本的態度と言える。例えばコークタウンについての描写である。

それは赤い煉瓦の町、或いは煙と灰が手出ししなかったならば赤かったであろう煉瓦の町であった。しかし現状では、絵の具を塗った野蛮人の顔のように、不自然に赤と黒が混ざった町であった。それは機械と高い煙突の町で、その煙突から、どこまでも長く続く煙の蛇がいつまでも這い上がってきて、決してそのとぐろを解くことがなかった。その町には黒く淀んだ運河と悪臭を放つ染料で紫色に流れる川があった。更に窓の沢山付いた幾つもの建物がぎっしりと立っており、

そこでは一日中ガタガタと震える音がし、蒸気機関のピストンが、憂鬱な狂気に取りつかれた象の頭のように、単調に上へ下へと動いていた。(24)

ここでディケンズが語ろうとしていることはあくまでも、陰鬱で単調なコークタウンという町の様子である。そしてそれを語る際に、ディケンズは野蛮人、蛇、象などを持ち出して、読者を「空想」の世界へと導いていく。恐らくグランドグランドやバウンダビーに語らせたならば、彼らはこれ程長い描写はしなかったであろう。「事実」の人間にとってコークタウンという町に存在するものは、黒ずんだ煉瓦と煙突から出る煤煙、そして工場から聞こえてくるピストンの音だけに過ぎず、それらを見聞きして野蛮人の顔や蛇、象などを連想することはないからである。しかしそれだけではこの町の持つ陰鬱さや単調さを十分に伝えることは出来ない。そこでディケンズは比喻を用い、読者の想像力に訴えたのである。結果、コークタウンという町が読者の目の前にまざまざと浮かび上がってくるのだ。想像力の効果が端的に表れた描写であるが、それでもこの描写は想像力が「真実を語る方法」として機能していることを示しており、先に引用したディケンズの信条を彼自身が実践したものと考えられる。

さて、この「事実」と「空想」の相関関係という観点からバウンダビーの嘘を勘案すると、彼の「空想」は「事実」と何らの関係も無い。ディケンズの信念に従うなら、「空想」は「真実を語る方法」としてあるべきなのだが、彼の立身出世談には語るべき真実がないのだ。この点で、彼の「空想」はディケンズが付した「厳密な真実がなければならない」という条件を満たしていないのである。それ故に、「事実」を歪曲することから生じたバウンダビーの「空想」は「邪悪な想像」として非難の対象となるのだ。このようにバウンダビーの嘘は、「事実」のみで生きることの限界を示すとともに、「空想」の条件として、正しい「事実」の認識が必要とされることを表わしてもいる。ここから「事実」そのものは否定された訳ではないことが明らかとなるのである。そしてそれは「事実」に基づく「空想」というディケンズの作家としての信念に拠るものであったのだ。

「事実」の世界が完全に否定されてはいない、という点で更に例を挙げるとすれば、シシー・ジュープであろう。シシーが「空想」の世界のシンボルとして機能していることは、既に多くの批評家が指摘しているが、そのことは、シシーの果たす役割、例えば「事実」の世界の人間は人間の心が理解出来ないのに対し、シシーはそれが理解出来ることや、この小説で‘fancy’という語を最初に使う人物がシシーであることから明らかである。

しかし問題となるのは、「空想」を必要とする「事実」の世界に生きる人々が「空想」の世界に入るのではなく、シシーが「事実」の世界に入ってきた、という点である。勿論、このことは、「事実」の世界の人間には「空想」が欠けているのだから、そこにシシーが入り込むことで、「事実」に支配された人間に、「空想」の必要性が認識される構図になっていると言うことで説明がつく。しかしそれだけではなく、「空想」の世界で生きてきたシシーにも「事実」の世界に入る必要性があったのではないとも考えられる。シシーがグランドグランドの学校に通うようになったのは、無学であった彼女の父親が、娘に教育を受けさせたいと望んだからであった。つまり「空想」の世界のみで生きることに、シシーの父親は限界を感じていたのだ。又、彼は或る日突然失踪するが、その直接の原因は、彼が年齢から来る衰えによって曲芸が出来なくなったという「事実」から目を背けたからで

ある。父の失踪後、シシーはグラッドグランドに引き取られ、その後彼女はサーカスに戻ることはない。シシーは「空想」の世界の象徴としての役を果たす際に、サーカスという「空想」の世界ではなく、現実の世界に生きることを求められていたのだ。(25)ここからも「事実」そのものは否定された訳ではなく、「事実」も「空想」同様、必要なものと捉えることが出来るのである。

以上見てきたように、ディケンズは『ハード・タイムズ』の中で、「事実」の世界を批判し、「空想」の必要性を説きながらも、「事実」そのものを消し去ることはしなかった。そしてそれは、「事実」に基づく「空想」というディケンズの信念があったからである。改心後のグラッドグランドは「事実や数字を信仰と希望と慈善に役立てた」(26)と述べられているように、彼は「空想」の世界を受け入れながらも、「事実」自体を捨てた訳ではなかった。ただその用い方を変えただけである。そしてそれは自ら否定してきた「事実」と「空想」との関係を認めることであったのだ。

確かに『ハード・タイムズ』は、「事実」と「空想」の対立を描いたものである。しかしその対立関係が生じたのは、「事実」重視の人間によって「事実」と「空想」が別個のものとして扱われ、切り離されてしまったことに起因するのではないか。そして当然ディケンズはそのようなことを容認する訳にはいかなかったのだろう。彼の考えでは「事実」と「空想」は相関するものであり、どちらも必要なものであったのだから。

註

- (1) 例えばロバート・バーナードは「欠点と弱さがありながら、『ハード・タイムズ』はテーマとその扱い方の両方において、空想の最終的勝利を見事に宣言している。」と述べている。Robert Barnard, "Imagery and Theme in *Hard Times*", *Charles Dickens's Hard Times*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1987), p.53.
- (2) Charles Dickens, *Hard Times* (The Oxford Illustrated Dickens; Oxford: Oxford University Press, 1994), p.223.
- (3) アンガス・ウィルソンはその一人。「その道徳的寓意は最初の二章ではっきりと述べられている。(中略)グラッドグランド氏の事実の重苦しい世界とスリーリー・サーカスの想像の世界の対比が明確に設定される。そしてディケンズにおいてこれ程単純なプロットが、舞台が設定された後、想定されている寓話を説明するのに役立つことは滅多に無い。しかし、殆どここでこの小説の価値は出尽くされてしまう。」Angus Wilson, *The World of Charles Dickens* (London: Martin Secker & Warburg, 1970), p.238.
- (4) 『ハード・タイムズ』の構成が、他のディケンズの作品よりも簡潔であること理由として批評家の間でよく挙げられるのが、週刊誌連載による紙幅の制約という点である。しかし同じ週刊誌連載でも、『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1860-61)のように構成が複雑な作品もあるので、それだけでは十分な説明とはならないであろう。この点に関しては今後の研究課題である。
- (5) *Hard Times*, p.7.
- (6) *Ibid.*, p.1.
- (7) *Ibid.*, p.3.
- (8) *Ibid.*

- (9) *Ibid.*, p.5.
- (10) cf. Philip Collins, *Dickens and Education* (London: Macmillan, 1964), pp.154-55.
- (11) Graham Storey, et. al. ed. *The Letters of Charles Dickens*, 10vols.(Oxford: Clarendon Press, 1965-), vol7, p.492.
- (12) Charles Dickens, *David Copperfield* (The Oxford Illustrated Dickens; Oxford: Oxford University Press, 1994), pp.54-5.
- (13) *Ibid.*, p.55.
- (14) *Hard Times.*, p.57.
- (15) *Ibid.*, p.58.
- (16) *Ibid.*, p.14.
- (17) *Ibid.*, pp.101-2.
- (18) *Ibid.*, p.287.
- (19) A. E. Dyson, *The Inimitable Dickens* (London: Macmillan, 1970), p.188.
- (20) *Hard Times*, pp.32-3.
- (21) *Ibid.*, p.261.
- (22) John Forster, *The Life of Charles Dickens*, 2vols. (London: The Waverley Book Company, 1911), vol2, pp.313-14.
- (23) 例として Paul Schlicke, *Dickens and Popular Entertainment* (London: Allen & Unwin, 1985), pp.177-78.
- (24) *Hard Times*, p.22.
- (25) シシーが現実の世界で生きる必要性については、Robert Higbie, *Dickens and Imagination* (Gainesville: University Press of Florida, 1998), pp.122-31. に詳しい。
- (26) *Hard Times*, p.296.

『英文学』第七十九号（早稲田大学英文学会、二〇〇〇年三月）